

---

# スイートポテトラブ

河 美子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スイートポテトラブ

### 【Nコード】

N3190Y

### 【作者名】

河 美子

### 【あらすじ】

リン先生との五枚企画です。

今回は恋愛。といっても初恋。

自転車の荷台に積んでいるのは、おばあちゃんの畑で獲れたサツマイモ。

みかん箱にたくさん入れて持って帰る途中、古いゴム紐が切れちゃった。

嫌な音とともに、切れたゴム紐が背中を打った。

「いったーい！」

まるで鞭のようになつて私の背中を打ったものだから、痛くて自転車を止めた。

止めた途端に荷台から落ちたサツマイモ。

ゴロゴロと坂道を下る。

「あーあ、だからこのゴムで大丈夫かつて聞いたのに」

おばあちゃんたら古くても切れはせんって。嘘ばかり。

その時に下からサッカー部が坂道のダッシュとかで走って来た。

「わあ、イモだ」

みんなが面白がつて拾い集める。

私は恥ずかしさで死にそうよ。高校一年生の純真無垢な女子高生なのに、サツマイモをばらまくなんて。しかも一番見られたくないサッカー部の吉岡君に見られちゃった。

「あ、桜ちゃんのイモか」

「う、うん」

みんなは笑いながら一人で食うのかと冷やかすから、もう涙が出そうよ。

「おばあちゃんの畑のサツマイモ」

「そうか、早く渡したら行くぞ」

吉岡君は颯爽とそう言うと、みんなのイモを回収して箱に入れてくれた。

私は半分泣きそうになりながら受け取った。

「俺、イモ好きだぞ」

「そう」

もつと気の利いたセリフで返したいのに、べそをかいてる私はそうとしか言えなかった。

荷台にもう一度紐をつなぎ合わせて箱を載せた。

背中では相変わらずゴムが当たった痛さでひりひりしていた。

家に着くと、イモの箱を台所に運びドサツと置いた。

「あら、桜。そんなにドサツと置いたら、イモの土が床に撒けるわ」

「もう、イモなんか獲りに行かない！」

「何を怒ってるの」

「おばあちゃんたら古いゴム紐でしばりつけるか、途中で切れたのよ。みんなに見られたわ」

母は目をくるくるさせて箱からイモを取り出した。

「大丈夫かしら、折れなかったかなあ」

「イモと私とどちらが大事なの！」

「あなたは大丈夫でしょ。箱が落ちたんでしょ」

「恥ずかしくて死にそうだったわよ。同級生に見られちゃったのよ」

「あら、まあ」

そう言いながらも、母は知らん顔でイモを洗い始める。

「今日は大学イモを作るわ」

あの飴で絡めた大学イモは大好きだけど、乙女の気持ちがまるで分かってないわ。

母は鼻歌まじりでイモを洗い出した。

「桜、洗ったら切ってちょうだい」

「うん」

母が相手をしてくれないから仕方なく乱切りにした。

ホクホクしたサツマイモ。

おばあちゃんの作るサツマイモは天下一品。

「おばあちゃんはまだ畑なの？」

「うん、サツマイモのツルを持って帰るって」

母が油を入れて、イモを揚げる。

「そこに砂糖と計量カップに計った水があるから、鍋で煮てちょうだい。ゴマもあとで入れるから」

「はい」

いい匂いが台所に充満する。

「ねえ、この大学イモ、拾ってくれた同級生にも届ける？」

「うんうん、いいの？ お母さん」

「こんなにも家では食べられないわ」

「わーい」

母がアルミホイルで包みなさいって。

「お母さん、あの可愛いホイル使っていい？」

「いいわよ」

キャラクターの柄のホイルを取り出して、大きく広げる。

ゴマを振りながら、吉岡君の顔を思いうかげる。

イモが好きな女の子はどうかしら。

何だか嬉しくてニヤニヤしていると、母が覗きこむ。

「あらあら、さっきまでふくれてたのに」

「意地悪」

でも、途端に気持ちが華やいで来るから不思議。吉岡君は私の隣の席。

いつも面白いことを言うし、スポーツもできる。お勉強は私の方が上かもしれないけど優しいところが好きなの。

この前も掃除当番の時、手に棘が刺さっていたら雑巾をさりげなく洗って絞ってくれた。

後ろの美香ちゃんが背中をつつついてきた。

「吉岡君、桜に気があるね」

「嘘、そんなことないわよ」

といいながら嬉しくて顔が赤くなっちゃった。

アルミホイルからこぼれるサツマイモの甘い匂い。

自転車のかごに入れてグラウンドまで走る。

グラウンドでは監督が怒鳴っていた。

「吉岡、そんなことではキーパー務まらんぞ！ さっきも言っただろっ！」

「はい」

ああ、なんてまずい時に来ちゃったんだろう。

吉岡君だけが叱られてる。

私は届けに来たという雰囲気にならないように、自転車で走り抜けた。

たまたまグラウンドの向こうに親戚でもいるかのように一周して帰って来た。

監督の怒鳴り声を背中で聞きながら。

悲しかった。

あつたかい差し入れをしたかったのに。

監督のバカ野郎。

涙が頬を伝って来た。

「ただいま」

「あら、桜。届けたんじゃないの？」

返事もせずに二階へ駆け上がる。

でも、折角心をこめて作ったのに。

母が玄関で誰かと話してる。

あの声は吉岡君。

バタバタと駆け下りていく。

「さっき、来てくれたんだろ？」

「えっ？」

「だって、高台のグラウンド近くには何もないし。いい匂いもした

し。罰として監督が代表で貰って来いって  
あ、そうか。

監督っていい人かも。

渡すところりした吉岡君。

「今度の日曜、試合があるんだ。見に来てよ」  
「うん」

母が台所でアリアを歌っている。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3190y/>

---

スイートポテトラブ

2011年11月17日20時59分発行